

**演題：「コロナ禍におけるこどもたち ～小児発達外来の現場から～」**

**講師：小児科医・児童精神科医 加藤 智美 先生**

役職：こころとそだちのクリニック あすなろ（児童精神科・小児科） 院長  
杏野会各務原病院（精神科） 非常勤医師  
岐阜大学医学部 客員臨床系医学准教授  
岐阜市教育委員会 教育委員

資格：小児科専門医・小児神経専門医・公認心理師

経歴：平成2年 岐阜大学医学部卒業 医師免許取得 岐阜大学医学部小児科入局  
平成5年 県立岐阜病院新生児科・小児科（集中治療、未熟児・新生児発達）  
平成9年 大阪府立母子保健総合医療センター  
平成11年 県立岐阜病院新生児科 医長  
平成14～26年 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター 助教～併任講師  
主に医療コミュニケーション教育・研究に従事 医学博士号授与  
この間、希望ヶ丘学園、長良医療センター、桜学館（児童心理療育施設）にて  
発達障害・情緒障害診療にあたる  
平成19～20年 米国ハーバード大学留学（医学教育） 客員助教授  
平成27～令和4年 網代診療所（小児発達） 副院長・発達医療センター長等  
令和3年 岐阜大学医学部精神科入局  
令和3年6月 杏野会各務原病院にて診療開始  
令和4年3月 こころとそだちのクリニック あすなろ 開業

所属学会：日本小児科学会・日本小児神経学会・日本精神神経学会・日本 EMDR 学会  
日本マインドフルネス学会

## 講演要旨

2019年12月に中国の湖北省武漢で新型コロナウイルス感染者が発生した当時は、私たちはまだ対岸の火事のように感じていたように思います。それがあれよあれよという間に世界を席卷し、私たちはパニックに陥りました。あれからおよそ3年の月日が流れた現在、ある程度のノウハウが蓄積され、平常運転の日常が戻ってきつつあります。この大きな変化を受け入れ、生き続ける人類の強さにあらためて気づかされるとともに、様々な自然災害があるとはいえ、平和で安全であったはずの日本に緊急事態宣言が発令され、こどもたちの安心の拠り所である大人たちが、あわてふためき右往左往する姿を目の当たりにして、こどもたちがどれだけ心細い気持ちで生活をしていたことだっただろうと、今更ながら心が痛みます。

小児科医になって30年余り、平成27年からは小児発達診療に専念してきました。発達特性を持ったお子さんの場合、本人も養育者も困り感を持ちやすく、家庭や園・学校において適切な環境を整えることが極めて重要なのですが、コロナ禍はその環境を大きく変化させました。ASD（自閉スペクトラム症）特性のあるお子さんは、変化に弱く、ルーティンが崩れると情緒不安定になりやすく、ADHD（注意欠如多動症）特性のあるお子さんは、生活習慣が身につけにくく崩れやすい、目先の楽しみを優先するといった特徴があり、コロナ禍による生活の変化は、大きな影響を与えました。また家族の在宅時間が増えることで、潜在的に存在していた家族間の問題が顕在化し、マルトリートメントにつながったという問題も指摘されています。ただコロナ禍がもたらしたものは、悪いことばかりではありません。ICTの活用が進み、学習の多様化に繋がったことは、その最たるものだと思います。

講演では、コロナ禍において、小児発達外来で出会ったこどもたちと親御さんとの対話から気づいたこと、考えたことを、様々なデータを交えながらお話ししたいと思います。災害などが起きた時にまずダメージをうけるのは、弱い立場にある人々です。日常が戻りつつある今、「喉元過ぎれば」ではなく、コロナ禍で炙り出された様々な社会の歪みをきちんと見つめ直し、社会的レジリエンスを高めることが、こどもたちの未来を守るために必要だと考えます。